

さんは戦を成さる方なるべし。其の戦をなすに服に紫絨金章は帯ぶるにあらざれば戦は出来ません乎、如何。將軍良久して曰く。町田さん誤りました。閉口々々。列座大笑に終れり。式開かれたるとき、杉皇后太夫を以て両陛下より、衣袴地の恩賜あり。面目を施したるに、藤田連三郎氏傍に在り曰く。町田さん実に御名譽なり。両陛下の恩賜はあなた一人なり。浦山敷き事にこそ、と言うに、直に恩賜品袴地を藤田氏に贈るに、杉子爵曰く。上人よ、今の恩賜を咫尺の間に藤田に贈らるるは憚あらむ。石谷平然として曰く。閣下よ、貧僧は何日路傍の橋下菰の上に死すべき身に、尊き恩賜物を置くは畏れ多く、幸藤田の家に重宝として保存の意に對し与へたるは、恩賜を尊重する次第なり。曩きに閣下を介し、勲位の返上再三に及ぶも勅許なく、却て恐れ多くも、勅語に、帶勲位の俣橋下に死するも不苦と。此の辺可然御了知相成度、且つ恩賜の御礼、閣下より執奏ありたし、と。

明治二十八年、或日、岸田吟香、大島義人の來訪あり。談話の末、大島氏曰く。上人に對し我等五六輩と申合せ、朝夕の御看勤所の庵室を建設し、月に二百円宛布施する考なり。而して上人は我等五六輩の外の骨董商の鑑定は御謝絶相成たし、と。石谷曰く。折角の御好意難有し。併し此の御企は、此の乞食坊主を餌に金儲なるべし。此の坊主は漸く世の煩を免れたるに、又々煩悶に苦を重ぬる訳にて、君等は友人として余り苛酷に過ぎざらん乎。御免を蒙る、と。一同笑に終われり。

或日、天賞堂主人菓子折を以て見舞に來り、曰く。御上人近頃恐入りますが、此の品御鑑定を願度と、古鋼の鼎を出す。石谷見て曰く。鋼を以て鑄たるものと鑑定す。又曰く。何の世に出來て、価は何程のものにや、等。答曰く。愚僧は今年五十八歳なり。此の以後の事は知るも、生れぬ先の事は、仏ならむ身で如何でか知るを得べけんや。又価は、出家で商法には縁遠き方に付、是れは柳原岸の斯道商に聞けば、

一斤何程と言相場あるべし。是が一番早分りなりと、澄し切つて言には、氣の毒なりし。

或日、上野桜雲臺の料理店主人は石谷と知り合の間柄なるに因り、來りて曰く。此の一玉に御上人の御鑑定書を願度と。石谷曰く。夫れは易き事なり。して其の鑑定書を貰うて何にする乎。主人答曰く。實は御上人の鑑定書あれば、某銀行家が金二万五千円に買う約束なり。故に御鑑定書を願う訳であります、と。夫れは面白き事なり。乞食坊主が一片紙の鑑定書が、二万五千円に買手があるとは恐入る。併し此の坊主に、貴公御儲を何程布施するや。答夫れは一般の商習慣に因りまして、一割即ち二千五百円を布施します。石谷真面目に、夫れはいかんわい。夫なれば何程布施しましよ乎。石谷曰く二万五千円を全部布施すれば、立派な奉書紙に認てやる。どうだ、と。座中一同大笑いとなりたり。

(一九九七年十月一日受理)

は、二幅ある而已。其の一は、井上候の切望に依り揮毫したる、細密画仏像是なり。他の一は、仙台市の加藤彦七郎氏に贈たる仏画、是れなり。

明治二十八年、高崎正風男招待の時、井上候に揮毫の如き着色密画の仏像を需められたるも、後日事を左右に托し終に筆をとらざりし。

石谷は、明治三十年九月十三日、東都上野公園の客舎に寂す。春秋六十、遺体は、遺言に依り法明院先師桜井敬徳の墓畔に葬る。遺児町田秀磨を以て三十代の町田家を相続す。

石谷没後末路に至て家に一品の遺物なし。思ふに入道以来の思想は、蓋し兼好法師が徒然草に叙する所の「身死して財残る事は智者のせざる所なり。よからぬ物蓄え置きたるも拙く、よき物は、心を止めけむとはかなし。こちたく多かる、まして口惜し。我こそ得め、など言う者共ありて、あとに争いたる、様悪し。後は誰にと志す物あらば、生けらむうちにぞ譲るべき。朝夕無くてかなはざらむ物こそあらめ、其の外は何も持たでぞあらまほしき」と言う信条を悟りたるもの乎、訝かし。生前明治二十九年迄は、浅草入谷の別邸倉庫に蓄積ありたるも、無一物の身とは出家入道の本義、さこそあるべきもの。平凡俗の敢て評す可に非ず。曾て明治二十八年の秋、強震の時、石谷が杉子爵に天機伺の執奏状に対し返書。「此度の地変に対しては宮中も変なし、天機伺は執奏せり。然るに貴僧は無一物にて無御安心ならむ」と。石谷終生の善交変わらざりしは、井上候爵、杉子爵の外求む可らず。蓋し君子の友と言うべき乎。石谷生前文化進展に努力の功績顕著にして、今日の文化は、石谷明治初年、有ゆる努力の結果に因るとして、両君の発起首唱を以て其の功績を後年に記念する為め、建碑を企てられ、世の有士に依り数千金の募集財を以て、上野公園帝室博物館内に一大碑石を建設し、其の碑文を重野文学博士の、撰書は杉子爵に因て、大正二年工を終えたり。井上、杉の両候子との交誼深りしを窺知すべし。

石谷が逸話

井上候爵、某年、肥前今里の陶土を以て、仏国の陶工に花瓶を焼かしめ、之を石谷に鑑せしに、曰く、土は日本土なり。併し焼は日支にあらず。愚僧には分からぬ、と言て去る。後ち某日、九鬼氏に鑑せしに、氏曰く、古今里なりと。候爵（一字不明）然して曰く、石谷師の鑑に、土は日本なるも、焼工合は日支にあらず、不明なり、分らぬ。と言ふて去れり。茲に至ては、流石に卓越の鑑識家なり。君の如きは、其鑑識石谷師に及ざる事遙に遠し。石谷師の、不明分からむ、とは、確に分り居る言にして、敬服すと。此の逸話は、曾て稻生氏が井上候訪問の際、九鬼氏の失敗談を咄されぬ旨を、石谷に送りたる稻生氏の書中の一端にあり。

明治（空白）年、先帝陛下銀婚式御挙行の際、参賀すべき旨杉皇后太夫の伝達に依り、遙々滋賀より出京。柿色木綿法衣に身を纏ひ、手に江南の竹杖を曳き、首にツタを掛け、のこのこ宮門に差掛く。貧僧は滋賀寺の光浄院住持石谷和尚なるが、今度陛下銀婚式御挙行に付、参賀すべき旨宮内省の御達を受け、禁中に罷通る旨を述べ、入門せんとするに、門警之を狂僧と誤認し、入門を禁ず。石谷曰く。然あるべし。乞食坊主が、貴き御儀式に参するは、最も恐れ多き次第なり。初めより参賀は恐多き事に付、閣下より祝賀の執奏を申入しにも係はらず、強て参賀の敵達に不得止罷出たる次第なり。禁入の御敵命畏り奉る旨述べ、引返さんとするに、門警長出て暫時待れよと言ひ捨て、之を杉子爵に通したるに、石谷和尚の悪戯には困る、と言うて、御通しなさいと。是に於て石谷儀式の（一字不明）席に入るに、文武百官綺羅星の如く、光輝燦然目映しき限なり。其の時傍に高島將軍があり、曰く。町田さん、出家入道するには、必ず頭髮を剃落し、丸坊主に袖の広きものを纏はざれば、入道されむものや、如何。石谷答曰く。高島

の実物を拝するは、今を以て初とす。斯の如き最高無二の宝物は、決して民間に保存す可きものに非ず。普通の民家なれば、敢て宮廷に奉納せんも、苟も九州第一流の大藩名族の御家にあるは、誠に幸とする所なり。願くは国家万世と、長なへに嚴重の御保存あらん事を。就ては茲に、小官の微忠を以て之を模し、宮廷に納め度に付、一時拝借の功願を許され度。老公は言下に許可あり（此の談話は録者が次席に侍し密に襖透間より見聞せし実話なり）。是に於て、之が模造に肝膽を碎き、當時有名なる篆刻家益田香遠と謀り、月余にして完成を告げ、直に宮廷に奉納す。模造の巧妙に至ては、其の実模は判ず可らず。形状、彫刻、重量、秋毫の差なし（大正六年益田翁を訪ひたる際に、翁の懐旧談に、倭王金印の模造には久成閣下と幾多の辛酸を嘗め、秋毫違はざるの模造を完成したるは、一世の努力心血を注ぎたる結果なりと。翁は春秋八十三を以て大正九年に没す）。

明治五年の頃、堺県令税所篤氏、曾て堺の旧家より購いたる、巨勢金岡の十六羅漢の大幅古画を携帯上京し、久成に鑑せしに、之れ容易ならざる無二の名画なるを以て、宮廷に奉納を懇請したるに、歎諾す。翌日之を宮中に納む。帝室は之に三万金の下賜あり。税所氏は大に面目を施す。其の真筆を局員と模写し、博物館に納め、今尚在と云う。久成は文士墨客有ゆる芸術家は挙て善文す。碩学鴻儒は林（鶴）梁、高須小梅、鱸松塘、向山黄村、大槻盤溪、岡千仞、成島柳北諸氏、文士としては西郷隆盛、岩下方平、八田知紀、後醍醐真柱、内田正雄、中井弘、速武吉次、墨客に至ては川上冬崖、瀧和亭、井上竹逸、大庭樂仙、福島柳閑、福原晴湖女史、篆刻家としては益田香遠外三四とす。各藩主にして、殊に寵を厚せしは、旧主島津忠義公を始めとし、土佐の容堂公、鍋島確堂公、伊勢の藤堂公、福岡の黒田老公、高鍋の秋月公、宇和島の伊達公、三条実義公にして、常に往来す。

又特に音楽に興味深く、雅楽は宮中の大令人山井景順に師事し、横

笛を学び、年二回は必ず宮中の令人十数輩を招き、春の花秋の月と、隅田の清流に舟遊合奏会を開催、又月毎に文士墨客の書画会を開催するを、無上の樂とせり。

明治二十一年の頃、滋賀遠城寺法明院住持高僧桜井敬徳師に、米国人某と仏典を学び、明治二十三年、元老院の廢院と同時に、剃髮滋賀に通世し、光浄院住持となり、大僧都に補せられ、権大僧正に進む、石谷と号す。米国人を月心と号せり。

石谷は画を能くするを以て、八万四千の白衣觀音の（二字不明）を揮毫し、以て世の喜捨財を蒐め、一大梵鐘の鑄造を企図す。喜捨の諸家、三井、住友、岩崎、藤田、古河、支那は故惣理衛門、李鴻章を始めとして、関西、名古屋、京阪神の知名の紳士紳商、幾多の喜捨淨財ありと雖ども、目的の大鐘を鑄るの資に充ず。故を以て、其の設計を縮小して、鑄造の実を挙げ、製品は、滋賀の光浄院にあり。李鴻章は、梵鐘の記文に、金地金と江南の竹杖一本を添贈せり。石谷言るあり。日本人として玉印を刻し、支那に贈りたるは、予の外になし、と傲語せり。

明治二十五年の頃、米國「チカゴ」に博覧會開設に、世界宗教會議開催に參列する為め渡米し、大に仏教の真髓を、米國の月心和尚と夜演をなし、淨財の喜捨を以て、米國に大伽藍の建設を企画す。一夜の講演に米貨二十万弗の喜捨ありしと云う。

明治二十八年、月心和尚の來簡あり。曰く日支の戦争克服の上は、伽藍建築の工事に就しむと。已に淨財も集まれりと。之に対し、実行して返信の稿を起さしむ。

明治二十五年、「チカゴ」発刊の新聞の記事に、仏教演説の事を掲げ賞讃し、且つ石谷が人格経歴等の記事を散見せり。

石谷は書画を能くすと雖ども一般の揮毫に應ぜず。偶々世に在るものは、書画會に臨て揮毫の淡墨席画に過ず。世に着色密画の在るもの

は、当時城代家老小松帯刀（肝付了山の第三子にて小松清穆の養子となり久成が伯父に当たる）、家老新納刑部、全岩下佐次右エ門（故岩下方平子）、町田民部等に出たるものと言う。渡英航路は、支那英領香港に始め、印度「シンガポール」「セイロン」島「ボンベイ」埃及土の「エデン」亜弗里加州の「スエス」鐵路「アレキサンドリヤ」地中海英領「モルタ」島を経、五十有余日を費し着英す。学生と共に英京倫敦府「オキスフォード」大学「編注・オックスフォードでなくロンドン大学」に入學す。留學十年を予期し、其の費二十万両（英金貨四万磅）を藩公御手許財弊の下賜あり。

滞英中、幕臣海軍奉行榎本釜次郎（故榎本武揚子爵先の農商務大臣）及び内田正雄（故文部中博士）両氏、幕艦回陽回天の二艦建造の爲め滯蘭の際、薩藩の密行学生の所分方内田正雄の議を榎本氏之斥け、大目に看過すべしと言はれたりと聞く。又滞英客舎に、不知の日本人三名來訪、面語するに長藩の密行学生伊藤俊介、井上聞多と全行の、山尾庸三（故工部卿後皇后太夫山尾子爵）、遠藤謹助（故造幣局長）、井上弥吉（故鉄道局長）の三氏にして、後ち互に往來す。山尾氏某日來訪、曰く、藩庁の送金途絶し困難に因り、學資貸与の懇請あり。久成は專斷藩金を貸す事は能わざるを以て、之を學生に諮り、十六磅（日貨八十兩）を醸し、山尾氏に贈呈す。氏は直に英國「スコットランド」の「ガラスコ」の造船所に行かる。

慶應三年、維新の兵乱に倉皇帰藩す。明治元年正月、徴士参与職外國事務長崎裁判所判事兼九州鎮撫使參謀を命ぜられ、従五位に叙せらる。之を頃くして、井上聞多氏と大阪外國館判事に転ず。明治二年東京遷都、外務大丞となる。後文部、大学、内務、各省の大丞、農商務大書記官、元老院議官等を歴任し、勲三等従四位の叙勲あり。

明治四年、東京桜田山下門島津邸上地に博物館を設け、米国「ヒラデルヒヤ」州開設博覽會出品の事務を管掌す。内務省設置に際し、之

に博物の一局を設け、自ら局長となり、局を上野公園に置き、公園全体を局に属さしめ、次長に山高信離を推し、少書記官に挙ぐ。局属は専ら博識宏才屈強の文士数名を挙げ、事に当たらしむ。浅草に一大文庫を設け、内外新古の書籍数万卷を蒐め、又は美術學校を開設し、絵画彫刻を啓発、文化進展の策に貢献す。或は私立學校として、神田小川町に、辻新次、佐原順一外二三と共營する英學校を設け、生徒の五十を教養す。西久保巴町私邸前天徳寺境地に個人經營の英學塾を設け、英人「グレグリー」氏を雇傭（月俸百五十兩）し、塾頭に小倉愛之進（鹿兒島人）を挙げ生徒十五六輩を教養す。家に食客十五名を養い、學費を給す。各等級あり。一等より四等に至る。平佐の城主、北郷の旧臣園田孝吉、有島武記を一等食客として、學費七兩貳分宛を給し、本郷大学南校（東校は漢學南校は英學）に通學せしむ。他は骨肉と雖も學淺きものは三等に貶し五兩、或は四等とし貳兩貳分を給し、英漢の塾に通學若しくは入塾せしむ（実行は最も學淺きを以て、三等に貶し、五兩を給し、狸穴町高須小梅の學塾に入る。學ぶ三年後松塘に學ぶ）。園田孝吉を外務書記生に、有島武記を大藏省十等出仕に推挙す。他の三五輩は各省の小吏に推挙す。当時久成が歳俸三千兩にして、概ね學校學生の費用に支弁し、余す所なし。家計は自家財産収入を以弁せり。

久成は書を能くし天性画技に長じ、且つ鑑識に富み、篆刻は天才に造詣深く、模造模写を巧みにす。無二と鑑する書画骨董は、国宝として宮廷もしくは博物館に納む。奈良の東大寺、興福寺、法隆寺等、帝國第一の古名刹の寺宝は、挙て国宝に編入し、局長勅封を以て開閉の制を定め、年毎に出張保存の当否を監査す。

明治五年の頃、福岡旧藩主黒田老公久成の私邸に來駕あり。昔漢帝が入唐の某僧に贈りたる、有名の倭王の金印を示され、久成人に驚き、之れ日本無二の宝物にして、小官は漢書に載するを見て知る而已。其

大学学校・社会教育講座・一九七一)に大久保利謙氏が簡単に紹介されたことがある。その際、記事の間違い、人名の誤記のあることを指摘しておられるが、今回翻刻にあたって、気付いた点は訂正し、或いは「」を付して注記した。ただし()は原本の注記である。なお、原文にはないが、読み易さを考え適宜句読点を付した。また原文は片仮名を使用しているが、本稿では平仮名を使った。表記法も読み難いところは、原文の漢文調の文体を損ねない程度に現代表記に改めた。なお、人名表記に疑義がある場合は、『明治維新人名辞典』(吉川弘文館)など、辞書見出し語の表記を基準とした。

この略伝は、私人町田久成について知りうる数少ない資料の一つであり、興味深いさまざまな逸話を見ることができ、事実関係について一般に知られている他の説と一致しない部分も所々あり、これらの点については、今後引き続き調査を進めて行きたいと考えている。

町田久成略伝 全

久成が小伝略記実弟が記憶を録する而已

町田久成、性は藤原氏、遠祖は島津に出づ。食邑千七百五十石、薩摩日置郡石谷城主二十八代の遠孫、町田少輔久長の長子、幼名五郎太郎、元服して助太郎、家を嗣ぎ民部久成と改む。母は日置吉利城主小松清穆の長女国子。天保九年戊戌正月鹿兒府の本邸に生る。四弟あり。各他家を嗣ぐ。安政三年丙辰九月廿三日、歳十九にして母を失う。母は孟母を崇敬し、頗る学を好み、藩の漢儒三原甚五左エ門に学ぶ。書は琉球鄙元偉書法を山田良助に習う。児甫めて八歳にして聖堂の学に就くや、經典余師を以て、膝下に経書の素読を教え教養怠らず。次子以下も教養に勉むも、長子は殊に訓養厳なりしという。母臨終に遺言して曰く、忌五十日を滿れば聖君に上願し、東都の遊学を以てす。安政三年歳十九にして君公(斉彬公)の特許に依り家臣一人、叔父町田亘五郎に擁せられ、東遊の途に就く。碩学鴻儒の林大学頭の門に漢学を脩め、平田篤胤の門に国学を脩む。学ぶ事三年、安政六年帰藩、當番頭(忠義公代)となり、進で御小姓組番頭となり、元治元年大目付に累進す。

慶応元年正月藩命に依り渡英密行、留学生寺島陶藏(故宗則伯外務卿)、森金之丞(故文部大臣)、鮫島清藏(故仏国全権公使)、吉田巳次(故農商務次官)、市来勘十郎(故松村淳蔵男海軍中将)、中村宗顯(故和蘭辨理公使)以下十名の学頭として渡英。随伴者家老新納刑部(新納武蔵守忠元の後裔先の司法少記官)、御船奉行五代才助(維新当時大阪府知事)、御船奉行見習通弁堀宗十郎(長崎人蘭学者堀辰之助の長子)「編注・長子ではなく次男」等にして、其の案内者として長崎寄留英商「カラバ」の手代英人「ホーム」なり。此の渡英密行の謀議

町田久成略伝

門田 明

まえがき

一八六五年薩摩藩がイギリスに送った留学生の責任者であった町田久成は、天保九年一月（一八三八年）に生まれ、亡くなったのが明治三十年（一八九七年）九月一三日で、今年が丁度没後百年にあたる。町田家所領の石谷城があつた鹿児島県日置郡松元町では、彼の業績を振り返り、中高生をイギリスに派遣するなど、記念行事をおこなっている。人々の目が彼にむけられているこの機会に、短いものであるが唯一と思われる、彼の伝記を活字にすることは、意味のあることだと考える。

久成は父久長（薩摩国伊集院郷石谷城主）母国子の長男で、申四郎、清次郎など四人の弟がいた。その後の履歴を列挙すると、一八五三年江戸昌平黌に学び、のち大目付となる。一八六四年薩摩開成所が設立され学頭となる。一八六五年イギリス留学を命ぜられ、留学生監督となる。変名上野良太郎。六月二一日ロンドンに着き、十月ロンドン大学ユニバーシティカレッジの聴講生となる。一八六七年パリ万国博覧会開会式出席、五月二一日帰国の途につく。一八六八年外国事務係。六九年外務大丞。七〇年、大学大丞であつた田中芳男と協力して、大学南校物産局に古今の物産を収集し物産会を開催、これがわが国博物館事業の端緒となる。一八七一年文部大丞となり博物館を設置、物産局の備品を引き継ぐ。七二年オーストリア博覧会出展の責任者、また

博覧会事務局長となり、四月日本最初の博覧会を開く。七三年太政官に進言して大博物館建設の要を説き、上野寛永寺跡を博物館・書籍館建設予定地とするよう建議する。七四年米國博覧会事務局長。七五年博覧会事務局を博物館と改称内務省所管となり、町田は内務省に転属内務大丞となる。五月博物館は第六局と改称され、町田が局長に就任。七六年第六局が再び博物館と改称され、初代博物館長となる。八一年一月上野公園に博物館竣工、四月内務省博物館および付属博物館は農商務省に移管され、上野も農商務省に転属。八二年博物館、動物園、書籍館を含む博物館の全組織が完成し、常時一般公開となるのを見定め、十月町田は博物館長を辞任（田中芳男が後任として局長就任）。八五年元老院議員。八九年元老院議員を辞職し、僧籍に入り近江国三井寺光浄院住職となる。一八九七年九月一五日東京上野法明院にて死去。享年数え年六十歳。

この履歴に見られるように、一八七〇年から八二年に至る官界での活躍の全てが、集中して博物館事業に捧げられている。自ら書画篆刻のたしなみがあり、美術品の鑑定眼も確かであつた。ヨーロッパ滞在中、博物館事業の重要性を知り、帰国後、維新改革の激動の中、多くの貴重な美術品が外国に流出し、或いは無知の故に破壊されてゆくのを座視できなかったたのであろう。官費が不足するときは、私財をもって収集を続けたと伝えられている。今はほとんど無名に等しいが、明治期の重要な先覚者の一人であり、博物館事業の歴史の中で、今後、更に克明に取り上げて調査されるべき人物と考える。

さて、ここに翻刻する『町田久成略伝』は冒頭に書かれているように、彼の実弟の記憶を記録したもので、罫紙十二枚に綴られている。末尾に「財部実行氏寄贈」と書かれ、現在は東京大学史料編纂所が所蔵している。

その所在と内容については、『MOUSEION』第一七号（立教